

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	濫用に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
殺菌成分	イソプロピルメチルフェノール	フェノールを使用	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。					頻度不明(過敏症)			・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現)			<ul style="list-style-type: none"> ・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には皮膚及び吸収され、中毒症状を起こすことがある。 ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・炎症または易刺激性の部位に使用する場合に、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包装、ギブス包装、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。] ・誤飲を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。 	長期間を使用しないこと。[吸収され、中毒症状の発現のおそれ。]	<ul style="list-style-type: none"> ・効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) ・排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) ・下痢疾患の鎮痛・痒疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液:フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) ・軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍) 			
塩化セチルピリジ	スプロールトローチ	口中で頻繁に遭遇する病原細菌である溶血性連鎖球菌や黄色ブドウ球菌またカンジダ等の真菌に対して、強力な殺菌作用を現す。					0.1%未満(口腔、咽頭の刺激感等)	5%以上又は頻度不明(過敏症)						口中で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)			1回1錠を1日3~4回かまらずに口中で徐々に溶解して使用する。	咽喉炎、扁桃炎、口内炎	

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量(誤使用のおそれ)			過量使用・誤使用のおそれ
	グルコン酸クロルヘキシジン	医療用には歯科用がなく、塩酸クロルヘキシジンのトローチ・ダントローチを使用	抗菌剤の中でも広範囲の微生物に作用する部類に属し、特にブドウ球菌などのグラム陽性球菌には、低濃度でも迅速な殺作用を示す。一方、大腸菌などのグラム陰性菌にも比較的濃度で作用することが知られているが、グラム陽性菌にくらべ感受性に幅がみられる。真菌類の多くにも感受性をしめすが、一般的に細菌類よりも抵抗性がみられる。							クオールヘキシジンに対して過敏症の既往歴					口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)			通常、1回1錠(塩酸クロルヘキシジンとして5mg)を1日3~5回、2時間ごとに投与し、口中で徐々に溶解させる。	口内炎、抜歯創を含む口腔創傷の感染予防
殺菌成分	クレオゾート	配合剤しかなかったため、薬局方を用いた	本薬の防腐、殺菌作用はフェノールに劣るが、毒性並びに刺激作用は弱い。粘膜、創傷面などに対し、初め刺激するが、後に知覚麻ひを起こす												大量使用で粘膜の刺激、腐食、更にめまい、昏睡、けいれん			うか及び根管の消毒、歯肉炎の鎮痛・鎮静。適法に従ってうか及び根管の処置後、適量を滅菌小綿球又は綿織維に浸潤させてか管内には根管内に挿入し、仮封する。	

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化		
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量(上 限)があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
チモール	保存剤とし てしかな かったため、 薬局方を 用いた	本薬は他の 有機物が共 存しなければ フェノールや クレゾールよ り殺菌力が強 い。健康な皮 膚、粘膜を腐 蝕せず、わず かに刺激によ り刺激を起こ す程度であ る。しかし、創 傷粘膜に対し てはかなりの 刺激性を有す る。内服して も著しく胃腸 を刺激するこ とがないから 内用剤として も用いられ る。				服用後、食道 や胃腔内に やけるような 感覚を引き 起こす。腸の ぜん動作用 を刺激して下 痢症状を起こ す。										局所の殺菌用 に液剤、軟膏 剤又は粉剤と して使用され ている。例えば、 チモール1%と サリチル酸3% を含むエタノ ール溶液、酸化 亜鉛やステア リン酸亜鉛を 含む1~2%の 軟膏、チモー ル2%、ホウ酸 35%を含むタル ク製剤などが 用いられる。そ の他本薬はう がいぐすり、洗 浄料、歯みが き剤などに添 加して用いら れる。
ヒノキチオー ル	配合剤のみ															

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 適用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用に より差大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			スイッチ 化等に伴う使 用環境の 変化
		フェノール	フェノール 歯科用では ない	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷菌等)及び 大部分のウ イルスに対 する効果は期 待できない。					頻度不明(過 敏症)			・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中 毒症状発現)				・原液または濃 度液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・腫に入らないよ うに注意すること ・本剤は必ず 希釈し、濃度 に注意して使用 すること。・炎症 または刺激性 の部位に使用する 場合には、濃 度に注意して正 常の部位に使用 するよりも低濃 度とすることが望 ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギブ ス包装、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあるので、 使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。[吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。]・誤飲 を避けるため、保 管及び取扱いに は十分注意する こと。	長期間に使 用しないこ と。(吸収さ れ、中毒症状 の発現のお それ。)		効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 疼痛(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)		
局所 麻酔 成分	アミノ安息香 酸エチル	ビソカイ ン・ゼリー	神経幹には 効果はないが 神経末梢部 において麻酔 作用があり、 粘膜および 皮膚刺激部 局所の知覚を 麻痺する作用 がある。 本剤は塩化 ベンゼトニ ウム含有し St.aureus FDA 209P, E.coliおよび P.aeruginosa に対し抗菌力 を示した。			中枢神経(震 戦、痙攣)	ショック	中枢神経(眩 暈、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐)	過敏症		・安息香酸エステ ル系局所麻酔剤 に対して、過敏 症の既往歴 ・メトヘモグロ ビン血症				・歯科用以外に 使用しないこ と、使用量は必要最 少量にとどめるこ と			本剤を適量取り、局所に 塗布する。	歯科領域にお ける表面麻 酔。		

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化		
			併用薬品(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
局 所 麻 酔 成 分	塩酸ジブカイ ン	ベルカミン 注、表面麻 酔類似と考 え使用			痙攣、痙攣等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眠 気、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐等)	頻度不明(過 敏症)		本剤に対し過敏症 の既往歴	本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、尋麻疹等の アレルギー反応を 起こしやすい体質、 高齢者、妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人。				使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 仙骨麻酔0.05～0.1%注射 液にエピネフリンを添加し たものを用い、塩酸ジブカ インとして、通常成人10～ 30mgを使用する。 伝達麻酔(基準最高用量: 1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人3～40mgを 使用する。 浸潤麻酔(基準最高用量: 1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、塩酸ジブカインと して、通常成人1～40mgを 使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜 麻酔には、1～2%液にエ ピネフリンを添加したもの を用い、噴霧または塗布 する。 ・眼科領域の麻酔には、 0.05～0.1%液にエピネフ リンを添加したものを用い、 通常成人には1～5滴を点 眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、 0.1%液にエピネフリンを添 加したものを用い、塩酸ジ ブカインとして、通常成人 男子10～20mg、女子3～ 7mg ・膀胱粘膜麻酔には、 0.025～0.05%液にエピ ネフリンを添加したものを用 い、塩酸ジブカインとして、 通常成人10～20mg ・局所鎮痛には、0.025～ 0.05%液を用い、適量を使 用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエピネフ リンを添加したものを用い、 伝達麻酔・浸潤麻酔には 塩酸ジブカインとして、通 常成人1～2mg	仙骨麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔・浸潤麻 酔

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 留性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化		
抗炎症成分	グリチルリチン酸モノアンモニウム：グリチロン注一号を使用	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					偽アルドステロン症、ミノキシジル、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等					長期適用により偽アルドステロン症	グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹	
	グリチルレチン酸	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					偽アルドステロン症、ミノキシジル、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等					長期適用により偽アルドステロン症	グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹	
組織修復成分	顔クロロフィリンナトリウム	内服の配合剤のみしかなかった																	
止血成分	カルバゾクロム	アドナ(AC-17)錠(10mg)／アドナ(AC-17)錠30mg／アドナ(AC-17)散10% カルバゾクロムがなかったためカルバゾクロムスルホン酸ナトリウム製剤の添付文書を使用	細血管に作用して、血管透過性亢進を抑制し、血管抵抗を増強する。血液凝固・線溶系に影響を与えないこと、出血時間を短縮し、止血作用を示す。血管透過性抑制作用、細血管抵抗増強作用、出血時間短縮作用、血小板・血液凝固系に対する作用、呼吸系・循環系に対する作用を有する。				0.1～5%未満(食欲不振、胃部不快感)	頻度不明(過敏症)			本剤の成分に対し過敏症の既往歴、高齢者						カルバゾクロムスルホン酸ナトリウムとして、通常成人1日30～90mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	毛細血管抵抗性の減弱及び透過性の亢進による出血傾向(例えば紫斑病等)毛細血管抵抗性の減弱による皮膚あるいは粘膜及び内臓からの出血、眼底出血・腎出血・子宮出血毛細血管抵抗性の減弱による手術中・術後の異常出血	
内服歯槽膿漏薬																			

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	過敏反応	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量(上) 過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			スイッチ化等に伴う使用環境の変化
抗炎症成分	塩化リゾチム	レフトーゼ錠	抗炎症作用: 膿瘍形成・組織修復作用: 膿液の分解と排出作用: 出血抑制作用					ショック、アナフィラキシー様症状・SJS症候群・Lyell症候群(頻度不明)	0.1~5%未満(下痢、胃部不快感、悪心・嘔吐、食欲不振)、 0.1%未満(口内炎等)、 頻度不明(肝機能障害 (AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、γ-GTP、LDHの上昇等、めまい))	0.1%未満(過敏症)		本剤の成分過敏症の既往歴、卵白アレルギー(アナフィラキシー・ショックを含む過敏症状)	アトピー性皮膚炎、気管支喘息、薬剤アレルギー、食物アレルギー等のアレルギー性素因、両親、兄弟等がアレルギー症状の既往歴、高齢者			作用機序は解明されていない点も多く、用量・効果の関係も必ずしも明らかでないため、慎重に投与しない。		1.慢性副鼻腔炎の腫脹の融解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチムとして、60~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の融解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチムとして、180~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の融解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿科)の場合、通常、成人は1日塩化リゾチムとして、180~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の融解の場合
組織修復成分	銅クロロフィリンナトリウム	内服の配合剤のみしかなかった																	
止血成分	カルバゾクロム	アドナ(AC-17)錠(10mg) / アドナ(AC-17)錠 30mg / アドナ(AC-17)散 10%	細血管に作用して、血管透過性亢進を抑制し、血管抵抗値を増強する。血液凝固・線溶系に影響を与えることなく出血時間を短縮し、止血作用を示す。血管透過性抑制作用、細血管抵抗値増強作用、出血時間短縮作用、血小板・血液凝固系に対する作用、呼吸系・循環系に対する作用を有する。					0.1~5%未満(食欲不振、胃部不快感) 0.1%未満(悪心、嘔吐)	頻度不明(過敏症)			本剤の成分に対し過敏症の既往歴、高齢者						カルバゾクロムスルホンナトリウムとして、通常成人1日30~90mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	毛細血管抵抗性の減弱及び透過性の亢進による出血傾向(例えば紫斑病等) 毛細血管抵抗性の減弱による皮膚あるいは粘膜及び内臓からの出血、眼底出血・腎出血・子宮出血 毛細血管抵抗性の減弱による手術中・術後の異常出血

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	習慣性					使用量以上	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
ビタミンC成分	アスコルビン酸「ヨシダ」	アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壞血病や小児ではスcurvy病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間の短縮などによる出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。								高齢者				下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀斑、炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。			通常成人1日50～2,000mgを1～数回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。	1.ビタミンC欠乏症の予防および治療(壊血病、メルレル・パロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体力労働時など。) 2.下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀斑、炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。なお、2の効能・効果に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 差用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づき 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化		
		カチーフン錠 (5mg錠)／ カチーフン錠 (10mg錠)／ カチーフン散 10mg/g	ビタミンKは 血液凝固機 能に関与し て、血液凝固 機能を正常に 維持する。	クマリン系抗凝血薬(ワル ファリン)(ワルファリンの作 用減弱)			類薬(メナジ オン)により、 高ビリルビン 血症(大量・ 長期投与) 頻度不明(悪 心、嘔吐、軟 便)		妊婦末期(大量投 与)				・大量・長期投与 で高ビリルビン血 症(類薬-メナジ オン) ・妊婦末期の婦 人には大量投与 を避けること。 (類薬-メナジ オン)で、新生児等 に高ビリルビン 血症)		フィナジオンとして、通常 成人1日5～15mg、新生児 出血の予防には母体に対 し10mg、薬剤投与中にお こる低プロトロンビン血 症に伴う低プロトロンピ ン血症には20～50mgを分 割経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	ビタミンK欠 乏の予防及び 治療 各種薬剤(クマ リン系抗凝血 薬、サリチル 酸、抗生物質 等)投与中にお こる低プロト ロンビン血症 胆道及び胃腸 障害に伴うビ タミンKの吸収 障害 新生児の低プ ロトロンビン 血症 肝障害に伴う 低プロトロン ビン血症 ビタミンK欠 乏が推定され る出血	
ビ タ ミ ン 成 分	酢酸トコフェ ロール	ビタミンE 剤:ユベラ錠	微小循環系 の賦活作用 を有し、末梢 血行を促す。 膜安定化作 用を有し、血 管壁の透過 性や血管抵 抗性を改善す る。 抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。 内分泌系の 賦活作用を 有し、内分泌 の失調を是 正する。				0.1～5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢)	0.1%未満 (過敏症)					末梢循環障 害や過酸化 脂質の増加 防止の効能 に対して、効 果がないの に月余にわ たって漫然と 使用すべき ではない。		錠 剤 通常、成人には1回1～2 錠(酢酸トコフェロールと して、50～100mg)を、1日2 ～3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 末梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、静脈血栓 症、血栓性静 脈炎、糖尿病 性網膜症、凍 瘡、四肢冷感 症) 3. 過酸化脂質 の増加防止	

禁煙補助剤

製品群No. 77

ワークシートNo.47

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	機能効果		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ			適応対象の 症状の判別に 注意を要する (適応を 感るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)
禁煙補助薬	ニコチン ニコチネル TTS	タバコに含まれるニコチンを経皮的に吸収させ、禁煙時の離脱症状を軽減	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	5%以上(一次刺激性の接触皮膚炎(パッチのため)、不眠)、0.1~5%未満(皮膚刺激・色素沈着(パッチのため)、頭痛、めまい、倦怠感、興奮、悪夢、薬中困憊、嘔吐、腹痛、口内炎、下痢、食欲不振、ALT、LDH、γ-GTP、総ビリルビンの上昇)、0.1%未満(疲労、しびれ、眩暈、易刺激性、胸焼け、AST上昇)	非喫煙者、妊婦・授乳婦、不安定狭心症・急性期の心筋梗塞・重篤な不整脈・経皮的冠動脈形成術直後・冠動脈バイパス術直後、脳血管障害、本剤成分過敏症 既往歴	心筋梗塞・狭心症 既往歴、狭心症で症状が安定している、高血圧、不整脈、脳血管障害、心不全、末梢血管障害、甲状腺機能亢進症、褐色細胞腫、糖尿病、消化性潰瘍、肝・腎機能障害、アトピー性皮膚炎・湿疹性皮膚炎(パッチとしての注意)、てんかん又は既往歴、神経筋接合部疾患又はその既往歴、高齢者、	禁煙の意志が強く、循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、代謝性疾患等の基礎疾患を併存患者であって、禁煙の困難な喫煙者にしようすること。	過量投与で急性ニコチン中毒症状。禁煙指導を実施。本剤使用中は喫煙により循環器系等への影響が増強されるので、喫煙させない。	禁煙の長期使用によりニコチン依存性が製剤に引き継がれ離脱が困難になる症例があるので、10週間を超えて投与しない。	ニコチネルTTS10(ニコチンとして17.5mg含有)、ニコチネルTTS20(ニコチンとして35mg含有)又はニコチネルTTS30(ニコチンとして52.5mg含有)を1日1回1枚、24時間貼付する。通常、最初の4週間はニコチネルTTS30から貼付し、次の2週間はニコチネルTTS20を貼付し、最後の2週間はニコチネルTTS10を貼付する。なお、最初の4週間に減量の必要が生じた場合には、ニコチネルTTS20を貼付する。本剤は10週間を超えて継続投与しないこと。	循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、代謝性疾患等の基礎疾患を併存し、医師により禁煙が必要と診断された禁煙意志の強い喫煙者が、医師の指導の下に行う禁煙の補助	